

2021年11月21日 主日礼拝

説教題「新しいぶどう酒を受けて」 マタイ福音書 9章 18～26 節

主任牧師 加藤 誠

「新しいぶどう酒を古い革袋に入れる者はいない。そんなことをすれば、革袋は破れ、ぶどう酒は流れ出て、革袋もだめになる。新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ。そうすれば、両方とも長持ちする」(マタイによる福音書 9章 17 節)

主イエスのもとに一人の父親がやってきてひざまずき懇願しました。「わたしの娘がたったいま死にました。でも、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、生き返るでしょう」。娘は「死んだ」のです。「死にそう」ならともかく、「死んだ娘を生き返らせてくれ」とは、この父親は自分が願っていることが分かっているのでしょうか。想像するのは、最愛の娘を失った悲しみに打ちひしがれ、焦燥し、錯乱して、主イエスの足もとに小さくうずくまっている父親の姿です。父親は自分が口に出していることが不可能なことだと頭では分かっている、「主イエスなら受けてくれる」と、どこにもぶつけようのない悲しみをこのような形でぶつけたのではないのでしょうか。

ここで厳然と私たちの前に立ちふさがっているのは、「死」というものが私たち人間の力では一ミリとも動かせないという事実です。「死」の前に私たちは無力です。子どものためならどんな犠牲でも払うという親の愛も無力です。そして私たちは時計の針を一秒たりとも戻すことができません。生きているうちは「やり直し」が効きますが、「死」の前では「やり直し」は効きません。「こうすればよかった」という後悔や無念の痛みをずっと引きずらなければならない。それが「死」というものです。それゆえ私たちは「死」の前に立ちすくみ、呆然とし、言葉を失うのです。また、当時のユダヤ社会において、「死」は忌むべきもの、ケガレたもの、触れてはいけないものと考えられ、律法でも「死体」に触れることを厳しく禁じられ制限されていました。そのために特に祭司や律法学者たちは「死体」に触れることを避けていました。

ところが、です。ここで主イエスは、私たちが立ちすくみ、呆然とし、言葉を失うほかない「死」を前にして、また忌むべきものとして人々が嫌った「死」に向かって、堂々と何事もないかのように進んでいかれます。これはどういうことなのでしょう。

私たちと同じ現実を生きていながら、主イエスは見えない神さまの愛の支配を生きておられるということです。私たちが目に見えるものに支配され、心動かされているのに対して、主イエスは神の言葉に支配されている。私たちが得体のしれない「死のケガレ」を忌み嫌い、恐れるのに対して、主イエスは「死」と「暗闇」をも支配しておられる愛の神さまと共に歩んでおられる。だからどんなケガレも恐れることがない。神の言葉に命があり、神の命は「死」をも打ち破り、「闇」の中に「光」

を照らし出し、希望に私たちを導いてくれる。その神さまの愛の支配のなかを、主イエスは生きておられるのです。

この主イエスは、「死」と「暗闇」が支配する世界を生き、さまざまなタブーに縛られ、恐れの中に生きている私たちに対して「新しいぶどう酒」として来てくださいました。この「新しいぶどう酒を受け取り、新しい革袋として、あなたがた自身の生き方が神さまの愛に向けて新しくされていくように」という招きを届けに来てくださったのです。

私たちは皆、必ず「死」を迎える命を生きています。しかも、どんな形でその時を迎えるのか、私たちにはまったく分かりません。この一年も、敬愛する教会員の方々、そしてそのご家族を天にお送りしましたが、その「死」の迎え方はさまざまです。ある程度心備えをしながらその時を迎えられたと思うケースもあれば、ほんとうに突然、予期せぬ形でその時を迎えることになった友もあります。周りの方々の経験から、ある程度予想はできても、いざ自分の最愛の家族を失うことになって、初めて気づかされる「死」という出来事の大きさ、厳しさ、寂しさというものもあります。

けれども、わたしがいつも教会という交わりの中で思うことは、一人の友の「命」と「死」に何らかの形でつながらせていただいて「生かされている自分」ということです。教会の友、信仰の友の大切な「命と死」の経験を分けていただいて、わたし自身が神さまから託されている「命をどのように生きていくのか」を深く考えるように招かれています。そういう意味で、教会という共同体につながられている有難さを覚えるのです。

現代は「死」が個別化され、日常の中から「見えなく」され、一人一人がバラバラにされているために、自分が生かされている「命」を見つめたり、受け取り直したりという機会がすっかり失われているように思います。教会の葬儀をサポートくださっている品川合同葬祭のIさんと先日お話ししていると、コロナ禍によって葬儀のほとんどが家族葬となり簡略化されて、「葬儀の文化」というようなものがすっかり失われてしまいつつあると言われていました。葬儀の時しか会うことのない親戚の叔父さんや叔母さんだけれど、そういう交わりの中に生かされてきた自分の親の人生を受け取り直す、貴重な機会としての葬儀。自分の知らない親の人生を知らされ、そうやって人と人との交わりに生かされてきた自分であることを受け取り直し、考え直す機会としての葬儀が今の時代には失われつつあるのではないかというお話でした。

そのような現代において、私たちが教会という共同体につながられ、何よりも「新しいぶどう酒」として来てくださった主イエスの愛と祈りにつながられる中で、お互いの存在と命、そして死を大切に受け合っていく。そのような教会という共同体に招き入れられていることを喜び合っていきたいのです。